

京都府立須知高等学校での探究型学習について

1 地域創生に関する探究型学習

普通科2年生 スーパーアドバンスコース10名の特色ある取組
課外活動として土曜日、放課後、長期休業中に活動。

- ①地域の観光資源の発掘
- ②フィールドワーク
- ③提案内容をグループで検討
- ④応募、発表に向けた資料作成
- ⑤提案（プレゼンテーション）

「森の京都」観光プランコンテスト出品（主催：南丹・中丹広域振興局）
書類選考2作品通過

- ・「休みだよ、みんな、京丹波町へ行こうじゃないか！
～太鼓をたたいて、笑顔になろう～」
- ・「懐かしいあの頃へ ～空間を楽しむ～」

10月28日（土）の本選（ガレリアかめおか）でプレゼンテーションを行い
京都府知事賞等を決定

2 ウィードに関する探究型学習

普通科3名、食品科学科1名の取組
自主的な課外活動として放課後、夏季休業中を中心に活動

第11回全国高校生歴史フォーラム(地歴甲子園)出品(主催:奈良大学・奈良県)
優秀賞受賞

- ・「日本近代農業教育の先駆け～ウィードと京都府農牧学校の奮闘～」

11月18日（土）に奈良大学でプレゼンテーションを行い、学長賞、奈良県知事賞を決定

3 今後の発展について

- これまで個別の取組であった探究型学習を学校全体の取組として発展
- 地元小中学校、京丹波町や地域企業等とも連携した探究型学習を推進
- 探究型学習成果発表関連の大会にこれまで以上に積極的に参加し須知高校の魅力を広くアピール
- ウィードの森など、日本農業教育発祥の地の1つであることの強みと、京丹波町の様々な魅力を最大限活用することで、京丹波町の地域創生に大きく貢献していきたい。

タイトル 休みだよ、みんな、京丹波町へ行こうじゃないか！
～太鼓をたたいて、笑顔になろう～

提案の内容

「子供を連れて田舎の方へ車でどこか行こうかな。」という親御さん、太鼓が大好きだという方を対象に考えた京丹波町の伝統文化である「丹波八坂太鼓体験」ができる日帰りの旅。

京都縦貫自動車道丹波 IC を下りて、丹波の町並みを楽しみつつ車で約15分。丹波八坂太鼓保存会の活動の拠点である下山小学校で太鼓の体験を約2時間します。

体験終了後は café moka で昼食、おすすめは京丹波食の祭典グランプリ受賞メニューである**ロコモコ丼**で、子ども達にも喜ばれること間違いなしです。また、ハンバーグメニューが多くあるのも point です。

食事の後は、道の駅「味夢の里」でお土産を購入しましょう。ここでは、京丹波町の特産加工品、野菜等が販売され、須知高校食品科学科が製造した食品も人気商品です。買い物の後は、隣接する「塩谷古墳公園」に行き、美しい丹波の風景を楽しんでみてはいかがでしょうか？

画像・イラスト・コース図など

丹波八坂太鼓体験

⇒

café moka

⇒



「ロコモコ丼」

道の駅 「味夢の里」

⇒

塩谷古墳公園



ここがポイント！（特にアピールしたいこと、提案のきっかけや理由、エピソードなど）

京丹波町を題材にした観光プランを考えることになったとき、私たちのグループは伝統文化に目を付けました。「京丹波町には素晴らしい伝統文化がたくさんある。だからこそ、もっと多くの人に知ってもらいたい。そして、次の世代へと伝統文化を伝えていきたい。」

そのような思いを大切にしながら観光プランの作成に当たりました。今回、丹波八坂太鼓保存会の方に協力をお願いしたところ、快く引き受けていただき、このプランが出来上がりました。

全国にある和太鼓文化、それぞれの背景や歴史、伝統的な奏法を受け継いで現代まで引き継がれています。この丹波八坂太鼓もまた、演奏する人も鑑賞する人も誰もが笑顔になれます。そんな太鼓の体験を親子やカップル、夫婦で楽しみませんか？

今回は、旧丹波町に限定したプランにしました。丹波町内を車で移動してもらうことで、町並みを楽しんでもらえることまちがいありません。

懐かしいあの頃へ～空間を楽しむ～

提案の内容

京丹波町ならではの自然を感じ、同じ空間を親子で楽しんでもらうツアーです。

1 日目は、道の駅「味夢の里」に立ち寄った後、京都府唯一の鍾乳洞である「質志鍾乳洞」を訪れます。都会の喧騒を離れ、「グリーンランドみずほ」のコテージにて宿泊します。都会ではできない体験や周りの自然を楽しみます。

2 日目には「質美笑楽講」にある特産物を使用したパスタやピザなどがあるカフェで昼食をとり、その後は「絵本ちゃん」で、子どもは絵本を楽しむ新鮮な空間、大人は昔ながらの小学校という懐かしい空間を楽しめます。

道の駅「味夢の里」「さらびき」を訪れ、京丹波町ならではの物を使用したお土産を見つけてもらいます。

画像・イラスト・コース図など

（各地より）丹波 I C → 道の駅「味夢の里」 → 質志鍾乳洞 →



グリーンランドみずほ（道の駅「さらびき」） →



→ 質美笑楽講 →

→ 京丹波みずほ I C（各地へ）



ここがポイント！（特にアピールしたいこと、提案のきっかけや理由、エピソードなど）

親と子が共に楽しむことがテーマなので、どこを訪れてもみんなが楽しめる——一緒の空間で違う楽しみ方を味わえるツアーです。

参加された方が、それぞれの「楽しかった」を感じることができるプランを考えました。

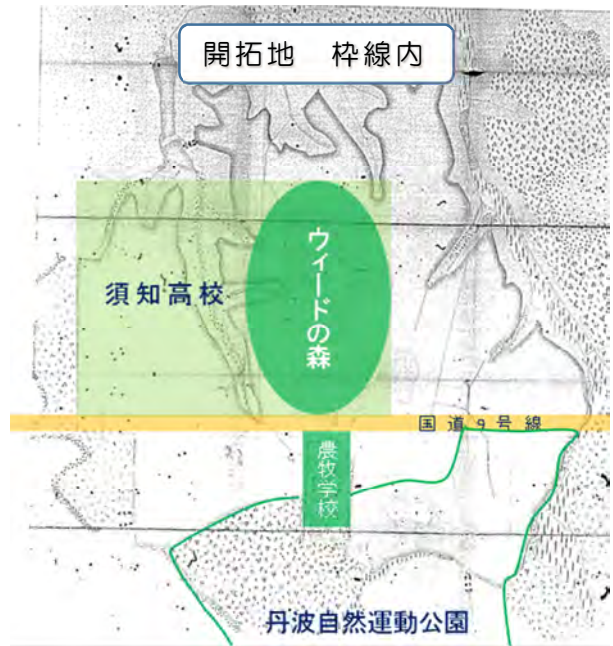
日本近代農業教育の先駆け～ウィードと京都府農牧学校の奮闘～

京都府立須知高等学校 ウィード研究班

はじめに～研究の背景と方法～

明治期、殖産興業を合言葉に、札幌と駒場で御雇外国人の指導のもと、西洋式農業教育が国家主導で行われた。それとほぼ同時期、一地方の京都府が類似の教育を施していたのが京都府農牧学校で、そこで教鞭を執ったのがジェームス・オースチン・ウィードであった。

私たちウィード研究班が通う須知高校は、140年前(明治9年)に設立された農牧学校を起源とする。当時の農具と教科書が、京都府立須知農学校(1923年設立、須知高校の前身)等を経て本校に伝来し、大切に保管されている。そこで、ウィード研究班は、開校140年の契機に、農牧学校の歴史を明らかにしようとして調査を進めた。ところが、農牧学校所在の船井郡京丹波町地域には、地元の史料を保管する資料館がない状況であった。そのため、地元の旧家や地区を訪ね、さらに公文書館・博物館・大学等にも調査に赴き、史料の収集に努めた。



1 ウィードの志～利益を重視し経済発展への道筋をつくる～

ウィードは明治6年(1873)京都府の御雇外国人となり、同年農牧学校の教職に就くまでの数年間、京都牧畜場(現、京都大学附属病院敷地内)講師として、西洋農法の講義と技術指導を行った。その時の講義内容を記した『農業会記』(同9年)が須知高校にある。それを読むとウィードは農牧の発展に加え、利潤追求、経済発展までを視野に入れていた。



2 農牧学校の実態～資金工面の苦労～

農牧学校創設1年目、府は自ら学資金を工面する自費生30名を募集したが、実際は10人にも満たず、翌年になって30人弱が集まった。明治11年、再度志願者を募ることとなったため、自費生の定員を満たさなかったと考えられる。その理由は、一般家庭の財力と授業に耐えうる能力の両方を満たす家庭の生徒が少なかったためであろう。そのためか、同年に欠員を補うため自費生の募集を再度行う一方、「農牧学校区費生徒選挙概則」という、京都府内各地区から一人ずつ区費生を選出して入校させる制度を定めた。



3 駒場・札幌との比較～地域の奮闘ぶりを見る～

駒場では、生徒は国家から給付を受ける官費生として、机・椅子・書棚・藁布団・毛布・紋帳・夏冬制服・制帽・雨衣・靴等が不足なく給与された。札幌農学校(明治9年創設)では、生徒は駒場と同様に原則官費生であった。そのため、生活・学業に必要な費用はすべて支給された。一方、京都府農牧学校の生徒にはそのようなことはなかった。

ただ、京都府は、国家の手厚い保護のもと進められた官立とは違いますが、むしろ一地方が国家に負けないくらいの努力と奮闘ぶりを見せている点に、注目すべきである。官立農学校と同時期に御雇外国人を招いて西洋農牧を展開した地方の努力は、他に見られない。

4 廃校後のウィードと生徒～再びウィードの志と地域に与えた影響～



したのではないかと推測し、神戸で発行された英字新聞『The Hiogo News』(廃校後3年分)を神戸市立文書館で調べ、神戸港の乗船者を確認した。しかし、J・A・Weedという記載はなかった。そこで、『The Japan Directory』という滞日外国人とその活動を記録した書物を調べると、明治13年(1880)にウィードは「tanba」から「Hiogo」(神戸外国人居留地59番地)に移っていたことが判明した。

おわりに

札幌と駒場とほぼ同時期に始まった京都府での農牧事業は、京都府のみならず日本全体の経済発展と国民生活の向上も視野に入れており、殖産興業の重要な役割を担う可能性を秘めていた。農牧事業の成果が確認される前に廃校となったが、一地方の奮闘ぶりに目を向けるべきである。廃校後も農牧学校の生徒や関係者が京都府の農牧事業に尽力した可能性を考え、地域創生の核として連綿と受け継がれてきた伝統も垣間見た。私達ウィード研究班は、今後も新たな史料開拓に努め、ウィードの残した痕跡を大切にする活動に参加し続けていきたい。

